

オーパ・クラフトの工房。熟練した職人による手造り



ボート造り39年。販売実績7,000艇。

経済産業省の事業認定を取得した

オーパ・クラフト社の分割ボート開発秘話。

名古屋から東海道線快速で東へ2駅。

JR大府駅の近くにオーパ・クラフトはある。

分割ボートのパイオニアとしてボート造りを始めて以来39年。

販売実績はすでに7,000艇を超える。その歴史と実績の背景を探ってみた。

写真・文=田久保 雅己(本誌)



人間が片舷に力を入れても安定しているフェンダーフロート。急な旋回時にも過度な抵抗がなく、小回りがきく操船ができるよう適正な位置に設置されている(写真はフロート用のスプレーよけが未だ設置されていない頃のもの)

オーパ・クラフトの現社長は福庭正宏氏(51)だが、創業者は正宏氏の父親である福庭進氏。進氏が同社を設立したのは昭和47年。最初は水道用設備に関わる仕事をしていたが、その関係で配管用のパイプを扱うようになりFRPとの付き合いが始まった。

釣り好きな進さんはFRPで小型のボート、しかも持ち運びに便利で収納も省スペースとなる2分割式のボートを考案。さまざまなテストを繰り返して本格的にボート造りを始めたのが昭和49年。以来、親子二代にわたりボートを造って39年の歳月が経過した。



幾度となく改良された分割ボートのモールド

現社長の正宏氏は、小学校のころから工場ですボートの型を磨いたり、時には釣り好きの父、進さんに連れられてボート釣りを楽しんだ。「このあたりでは三河湾や伊勢湾へ釣りに行くのですが、当時父が持っていた一体型の小型ボートでけっこう遊びました。根魚を釣っていて、気が付くと強風が吹いてきて、慌てて逃げたり、いま思うと恐い思いも何度もしました」(正宏氏)

自ら釣りを楽しむ身として、釣り人の性格や環境を把握して「釣り人が造った、釣り人のための2分割式小型ボート」。最もこだわったのは一体型のボートではないために、接合部が壊れることは、「そらみたことか、やはり分割式は危ない」というレッテルが貼られてしまうため、接合部は特に頑強に造った。これまで同社のボートの接合部が裂けたという苦情は一度もないが、仮に他の部分が壊れたとしても、接合部だけは壊れない設計になっている。ただし、FRP製品としての適切な保管方法と耐用年数があるので、保管状況や使用履歴がよく分からないオークション品等、中古品にはくれぐれも気を付けてほしいとのこと。

こうして二分割式ボートはアイデアの良さと頑丈さが受け、世は当時高度成長期でもあり飛ぶように売れた。いまは卸し売りをせずに直販体制をとっているが、バブル期は卸しもしていたためにこれまでに販売した約7,000艇のうち3分の2は卸し売りをしていたときの数字だそうだ。

経済産業省の認定事業として認められる

正宏氏は、大学で生物学を学びドクターを目指していたが断念。その後、社会人としてサラリーマン生活をしているときに父の体調が良くないことを知り、家業を継ぐ気持ちが出てきて30歳の頃からオーパ・クラフトの社員として働くことになった。

父親譲りの職人魂をもつ正宏氏はボート造りの現場に入りながら、父親が手作りで造ったオーパのボートを科学的に分析し始めた。友人を頼り、大学の研究室で実験やデータ解析をしてもらったりしながら、オーパのボートの構造や力学的な裏付けをした。その研究の結果をさらに現場に反映させ、何年もかけて、見た目には変わらないが重心の位置を変えたり、強度を高めたりした。

こうしてボートの実力が上がるとともに売り上げも伸びて行った。そして正宏氏が40歳の頃、父親である進氏が引退して社長に就任。また、時代が変わり不況期に入ったことを自覚して、卸し売りをやめ、すべて直販に切り替えた。



福庭社長は、ボート造りによってより豊かなボートフィッシング文化を提供することによる社会貢献を目指している。東日本大震災のときは「不要釣具で義援金を」と呼びかけ義援金を集め日赤に約32万円を寄付

寝ても覚めてもボート造りが頭にある、福庭正宏社長



アイデア
満載の
分割ボート



このモデルはオーパライト3



分割すると大人一人で軽々持ち運べる。また、重ね合わせると軽のライトバンの荷台にすっぽり収まるコンパクトさ



左：船体前部と船体後部をジョイント部分が接するように並べて置いたところ。この状態からそれぞれのジョイント部分のカギ型部分をかみ合わせる動作に移る
右：カギ型部分をかみ合わせ、ジョイント板を挿入して、最後にノブを締めているところ。先代社長のアイデアを更に進化させた接合部

当然、ロフトへ直接購入に来るお客と対面販売することになる。初めてボートを購入する初心者も新社長になった福庭氏はさまざまなお客と接し、ときには一緒に釣行にも同行した。そうしたなかで何よりも大切なのは、「安全性」、「耐久性」、「利便性」であることを再認識したのである。あたりまえのことではあるが、福庭氏の場合は、それこそ徹底的にさらに深く三大要素を追求する作業を始めたのだ。

まず、快適に楽しめる小型ボートの条件をさまざまな立場のユーザーや研究者の意見をもとに60アイテムほど絞り出しひとつひとつ潰していった。その結果、開発されたのがすでに特許を取得したフェンダーフロートでありオリジナルドローリーであり、実用新案登録済みのフロート波よけカバーであり、意匠登録済みのオリジナルサオ受けでありコマセホルダーである(ウェーブブロッカーも特許申請中)。

それぞれの開発意図は写真の



ウェーブブロッカーをびたりと閉めたところ

キャプションで紹介するとして、ここではさらに福庭氏の表面では見えない船体構造についてお伝えしよう。

フェンダーフロートは既製品、それも30フィートクラスのボートで使用される頑丈なものを使用している。その浮力による安定性向上や一瞬で着脱できる機能も脱帽ののだが、装着する個所が船体に受ける力を分散する積層構造に独自のアイデアが秘められているのである。軽量化を図るとともに船体の積層の厚さを微妙に変化させることで、一点にかかる負荷を分散することに成功した。福庭さんはこれらの開発に7年という歳月をかけた。

この成果を含めて、経済産業省は「FRPの積層技術を活用し、転覆防止用フロートの装着を可能にした小型船艇の製造販売事業」として、優れた地域産業資源(愛知県のプラスチック技術)を活用し、「安全性の飛躍的向上に繋がる独創的発想」を創出したという理由で評価。平成24年2月に経済産業省の事業認定を正式に取得した。

「こうして事業認定を受けると、社会貢献という意味でも直販にこだわらずにより多くのユーザーに楽しんでいただくために、卸し売りも視野に入れたいといけなかなと考え始めているところです」と福庭氏は語る。

おそらく海外に輸出しても、その安全性において世界に通用する分割式小型ボートであろう。



ガラスの200倍の強度があるポリカーボネート製の透明なウェーブブロッカー(波よけ)。左右に動かためアンカーをセットしたときはセンター部分を少し開くことも出来る



簡単に取り外しができるウェーブブロッカー



必要のないときはウェーブブロッカーを船内側に収納することも出来る



左：釣り人はすぐに海に出たい。装着もワンタッチで、しかも外れないシステムのフェンダーフロート。舷側を守るフェンダー機能だけでなく、横転防止に力を発揮する
右：フェンダーフロートの前方にはスプレーよけが付いており、さらにその下には走航中に浮遊物と接触しても跳ねのけるワイヤが配されている



左：左右のサイドに設置するフェンダーフロートを外すと、そこへ簡単に設置できるオリジナルドローリー。写真は外したドローリーを船内に収容したところ
右：船内に収容したドローリーが動かないように、こちらもワンタッチでロックできるシステムになっている



こちらは取り外しがワンタッチでできるオリジナルサオ受け



こぼれたコマセが船内に落ちず自然に外へ流れるアイデアのコマセホルダー

問い合わせ：有限会社オーバ・クラフト
〒474-0023
愛知県大府市大東町2丁目100番地
TEL.0562-57-3901